

# 上野殿御返事

建治三年五月一五日 五六歳

五月十四日にいものかしら一駄、わざとをくりたびて候。当時のいもは人のいとまと申し、珠のごとし、くすりのごとし。さてはおほせつかはされて候事、うけ給はり候ひぬ。

尹吉甫と申せし人はたゞ一人の子あり、伯奇と申す。をやも賢なり、子もかしこし。いかなる人かこの中をば申したがふべきとおもひしかども、継母よりよりうたへしに用ひざりしほどに、継母すねんが間やうやうのたばかりをなせし中に、蜂と申すむしを我がふところに入れて、いそぎいそぎ伯奇にとらせて、しかも父にみせ、われをけさうすると申しなしてうしなはんとせしなり。

頻婆娑羅王と申せし王は賢王なる上、仏の御だんなの中に閻浮第一なり。しかもこの王は摩竭提国の主なり。仏は又此の国にして法華經をとかんとおぼしに、王と仏と一同なれば、一定法華經とかれなんとみへて候ひしに、提婆達多と申せし人、いかながして此の事をやぶらんとおもひしに、すべてたよりなかりしかば、とかうはかりしほどに、頻婆娑羅王の太子阿闍世王を、としごろとかくかたらひて、やうやく心を取り、をやと子とのなかを申したがへて阿闍世王をすかし、父の頻婆娑羅王をころさせ、阿闍世王と心をつにし、提婆と阿闍世王と一味となりしかば、五天竺の外道悪人雲かすみのごとくあつまり、国をたび、たからをほどこし、心をやわらげすかししかば、一国の王すでに仏の大怨敵となる。欲界第六天の魔王、無量の眷属を具足してうち下り、摩竭提国の提婆・阿闍世・六大臣等の身に入りかはりしかば、形は人なれども力は第六天の力なり。大風の草木をなびかすよりも、大風の大海の波をたつるよりも、大地震の大地をうごかすよりも、大火の連宅をやくよりも、さはがしくをぢわなゝきし事なり。さればはるり王と申せし王は阿闍世王にかたらはれ、釈迦仏の御身にしたしき人数百人切りころす。阿闍世王は酔象を放ちて弟子を無量無辺ふみころさせつ。或は道に伏兵をすへ、或は井に糞をいれ、或は女人をかたらひてそら事いひつけて仏弟子をころす。舍利弗・目連が事にあひ、かるだいが馬のくそにうづまれし、仏はせめられて一夏九十日馬のむぎをまいりしこれなり。世間の人のおもはく、悪人には仏の御力もかなはざりけるにやと思ひて、信じたりし人々も音をのみてもの申さず、眼をとちてものをみる事なし。たゞ舌をふり手をかきし計りなり。結句は提婆達多、釈迦如来の養母蓮華比丘尼を打ちこ

ろし、仏の御身より血を出だせし上は誰の人かかたうどになるべき。

かくやうやうになりての上、いかゞしたりけん法華經をとかせ給ひぬ。此の法華經に云はく「而も此の經は如来の現在にすら猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや」と云云。文の心は、我が現在して候だにも、此の經の御かたきかくのごとし。いかにいわうや末代に法華經を一字一点もとき信ぜん人をやと説かれて候なり。此をもておもひ候へば、仏法華經をとかせ給ひて今にいたるまでは二千二百二十余年になり候へども、いまだ法華經を仏のごとくよみたる人は候はぬか。大難をもちてこそ、法華經をしりたる人とは申すべきに、天台大師・伝教大師こそ法華經の行者とはみへて候ひしかども、在世のごとくの大難なし。ただ南三北七・南都七大寺の小難なり。いまだ国主かたきとならず、万民つるぎをにぎらず、一国悪口をはかず。滅後に法華經を信ぜん人は在世の大難よりもすぐべく候なるに、同じほどの難だにも来たらず、何に況んやすぐれたる大難多難をや。虎うそぶけば大風ふく、竜ぎんずれば雲をこる。野兔のうそぶき、驢馬のいばうるに風ふかず、雲をこる事なし。愚者が法華經をよみ、賢者が義を談ずる時は国もさわがず、事もをこらず。聖人出現して仏のごとく法華經を談ぜん時、一国もさわぎ、在世にすぎたる大難をこるべしとみえて候。

今、日蓮は賢人にもあらず、まして聖人はおもひもよらず。天下第一の僻人にて候が、但經文計りにはあひて候やうなれば、大難来たり候へば、父母のいきかへらせ給ひて候よりも、にくきものゝことにあふよりもうれしく候なり。愚者にて而も仏に聖人とおもはれまいらせて候はん事こそ、うれしき事にて候へ。智者たる上、二百五十戒かたくたもちて、万民には諸天の帝釈をうやまふよりもうやまはれて、釈迦仏、法華經に不思議なり提婆がごとしとおもはれまいらせなば、人目はよきやうなれども後生はおそろしおそろし。

さるにては、殿は法華經の行者ににさせ給へりとうけ給はれば、もつてのほかに人のしたしきも、うときも、日蓮房を信じてはよもまどいなん、上の御氣色もあしくなりなんと、かたうどなるやうにて御けうくむ候なれば、賢人までも人のたばかりはをそろしき事なれば、一定法華經すて給ひなん。なかなか色みへてありせばよかりなん。大魔のつきたる者どもは、一人をけうくんしをとしつれば、それをひっかけにして多くの人をせめをとすなり。日蓮が弟子にせう房と申し、のと房といぬ、なごえの尼なんど申せし物どもは、よくふかく、心をくびやうに、愚痴にして而も智者となのりしやつばらなりしかば、事のをこりし時、たよりをえておほくの人をおとせしなり。殿もせめをとされさ

せ給ふならば、<sup>駿河</sup>するがにせうせう信ずるやうなる者も、又、信ぜんとおもふらん人々も、皆法華經をすつべし。さればこの甲斐国にも少々信ぜんと申す人々候へども、おぼろげならでは入れまいらせ候はぬにて候。なかなかしき人の信ずるやうにてなめりて候へば、人の信心をもやぶりて候なり。

たゞをかせ給へ。梵天・帝釈等の御計らひとして、日本国一時に信ずる事あるべし。<sup>そ</sup>爾の時我も本より信じたり我も本より信じたりと申す人こそ、<sup>多</sup>をく<sup>在</sup>を<sup>は</sup>せずらんめとおぼえ候。

御信用あつくを<sup>は</sup>するならば人のためにはあらず、我が故父<sup>こちち</sup>の御ため、人は我を<sup>親</sup>やの後世にはかはるべからず。子なれば我こそ故<sup>親</sup>を<sup>や</sup>の後世をばとぶらふべけれ。郷一郷知るならば、半郷は父のため、半郷は妻子眷属をやしなふべし。我が命は事出できたらば上<sup>かみ</sup>にまいらせ候べしと、ひとへにおもひきりて、何事につけても言<sup>ことば</sup>をやわらげて、法華經の信を<sup>薄</sup>うすくなさんずるやうをたばかる人出来せば、我が信心を<sup>試</sup>ころむるかとおぼして、各々これを御<sup>教</sup>け<sup>訓</sup>うくんあるはうれしき事なり。たゞし、御身をけうくんせさせ給へ。上の御信用なき事はこれにもしりて候を、上<sup>上</sup>をもておどさせ給ふこそをかしく候へ。参りてけうくん申さんとおもひ候ひつるに、うわてうたれまいらせて候。閻魔王に、我が身といとを<sup>愛</sup>しとおぼす御<sup>妻</sup>めと子とをひっぱられん時は、時光に手をやすらせ給ひ候はんずらんと、<sup>憎</sup>にくげ<sup>氣</sup>に<sup>云</sup>うちいひておはすべし。

に<sup>新</sup>い<sup>田</sup>だ殿の事、まことにてや候らん。<sup>興</sup>を<sup>津</sup>きつの事、きこへて候。殿もびんぎ候はゞ其の義にて候べし。<sup>構</sup>かまへておほきならん人申し<sup>敵</sup>だしたらば、あはれ法華經のよきかたきよ、<sup>う</sup>優曇<sup>げ</sup>華か、<sup>も</sup>盲<sup>う</sup>龜の<sup>ふ</sup>浮<sup>も</sup>木かとおぼしめして、したゞかに御返事あるべし。

千丁万丁する人も、わづかの事に<sup>忽</sup>たちまちに命をすて、所領を<sup>召</sup>めさるゝ人もあり。今度法華經のために命をすつる事ならば、なにかは<sup>惜</sup>を<sup>し</sup>かるべき。薬王菩薩は身を千二百歳が間やきつくして仏になり給ひ、檀王は千歳が間身<sup>床</sup>をゆかとなして今の釈迦仏といわれさせ給ふぞかし。さればとて、ひが事をすべきにはあらず。今は<sup>捨</sup>すてなばかへりて人<sup>笑</sup>わらわれになるべし。<sup>方</sup>かたうど<sup>人</sup>なるやうにてつくりを<sup>落</sup>として、我もわらい人にも<sup>笑</sup>わらわせんとするが<sup>奇</sup>きく<sup>怪</sup>わひなるに、よくよく<sup>教</sup>け<sup>訓</sup>うくんせさせて、人の多くきかんとおぼして、人をけうくんせんよりも、我が身をけうくんあるべしとて、かつはたゞせ給へ。一日二日が内にこれへきこへ候べし。事おほければ申さず、又々申すべし。恐々謹言。

五月十五日

日 蓮 花 押

上野殿御返事